細川幽斎聞書　下

へ利4
50
2

へ 4
50
2止

令社 河合 生家
浅野氏 図書館
門 利 / 類 50 / 巻 2

二十　句より下へ切字半在之事

一句よりはなちてよきて二ツ一句ハ一二の句よ
てきるハあるもあり第一の句てきれぬる句
鴫たつ沢の秋の夕暮といふ風雅の下露
第二の句てきれぬる句
春はてもこゆる袖と歌よみて折ぬるも此袖のきれ
第五すての半なるのゆるより第五ゆてミ
句ハとりふ吹たるなれたるの縁語なる
一つハなるの半なし不習紙半之に師説

切字之事

一　月乃秋それの長さくつよりゆかれ

南葵文庫

ハ川もみしはさらさらきりしとはしくもす
ゑさえし秋の酒宴お伽し鈴窓
や山やうらしされの松ちる川まつのさと
そむさけしといはねかりそ舞乃こゑ
り花の梅もうくわるまみちら夜米立
まかりくくもすまを山おすりねこゑもれ
まほ上まてゐ松のかつきねみとかれし
ね松文ね松のうこのあさ川りせ
ゑりうる人と風も錦うりむさうり
ゑん明月もうん浅はされのく小鷺うり
ドりゝちせね松もうしう宮の松

さそ秋くの月さそすゞの江のうさすゞ
と松虫もはよ川か松と荻のこゑ
よ梅くよ見ゆし伽も深川へし
はさすはよりよ白ふ舟もいさ梅のくれ
いそまよく松しいそかまるのうすかはら
ゑそこの氷山とそちしは志りのくる
雪雪きうき庭の卯むをそさう
いくみよまつかね上手まいくまさき窓
下部と鈴ちらるむすいて酒なき年の宮
以上 何　うゆへは川山りまきるの浅録
うそくまてはくらりときけるとも萬年

まこと略哉とはそれといひてはあるべし哉
中はたゞね字の事といつまでなる雑
おのづからしてかねてはいはず字なりてい
かねられふ中は二字かねたる中事なり合は
かんたんせんなとしかねは事

二十一 対句之事

これは句の上下懸合の事なり句は問答のこ
とし或は上句にてとひて下句にてうける事とは
下句にて答とあり下句よりいふべき事
とは上句よりつまりそうて句はいむ事之
詩の起承轉合なといふやうに下句まて握

こゝろは上句より下へかゝりたるやうの
ことにて おなじく下に梅さくらなどの
景気とかはるまじきなり大かたの事は上と下
句よりかけて用ゐし上の句よりつゞけて上句
の体をかゝりみれば異様の句になるなり
よくにかゝりたるとひとつの理はさこにおこる
いふともしけるひあしきは会話の事なり
当代かくの句にも河月といふ題にて
秋のよたのめし月の種川なるを新はよそに花散
山寺の秋を上句のことかゝりされば下句まで
きこゆるなりとてもよろしき心ならずなりとぞ

なるか方よわくなるへしと申く 此歌ハおほせられ
したりける其の事一字千金の定制なりと

二十二 ぬ文字之事

定家卿てのいつくぬ文字ハよく〳〵心雅して後よ
とくつきまてハされハ加様何も有ことくにぬ文
字ぬと云語に付きましある披講のとき
出来してされハ何の句ようくことくに初の句の
ぬなるにけるおもしろふ尽し侍る左合にぬ文
字といふのらよのかみ事はそさるはそれ語の也
うまはとかして侍しかハ源氏物語一葉半字也
ぬかりとおもひきはて其跡はにしかしと

ぬく云ハ下よりの業してぬ文字といふのらるとく
へきまてハ但ぬ字の事ハ一むかしまてハおすへ
ぬれく大たハ心のましし上の句よりかんし
とりのあるそうなるか出来よりおもしろき
下句よりれあぬといふハそれの庭訓まうすへきりれ
はこしなりと口伝
又ぬ文字ぬ其侍しと申ん方ハミよひつる
ぬるぬ文字あり分しといひつぬ也ぬるぬ文字
ありかたにくみしまことに此ぬ文字なとやう
まそ其のぬ文字なりけりよひしとくひけ仍て
一首のうちんとなくといはるのぬ文字とやと候

かうひきかへてきらはず

二十二 かな文字に可有用捨詞之事

一 なかくの仮名文字承久二年八月十日和哥定家卿判
未句不聴合とてうれとゝろゝ文永八年九月
十三日和哥為家卿判にもなかくといひおほせてのこ
之侍るすくなんてにゝれとかゝれ云ふよ付ゝうかれ
ともそれ聴之仍可用之也

一 おほしくは　此仮名文字相應したる きらんは相応し
うらしと為家卿判にてなかにてゝ

一 月やおもふね　定家卿判にゝう我のなの仮名文字
ちゝえへしてす

つくしと　是又名所の仮名文字に可然也
さゝちる　是又名所の仮名文字也
なかあるし　これも名所の仮名文字也
まろこひは　すなはち聞たるをきらんはおほつかなし
くもし
いつれやん　是又かはりてハ不可聴合
志有余の仮名文字なりとつゐきも此式を守へし
くんくへさして可用捨之

二十四 詞のうへにそへたる事

一 宗祇宗匠連歌にてつゝき読聞大かたにつゝきあく
くみたるぬ其上にて一向にきはまりた

こゝ家とハ文一向よろれ候ぬめ此業しくへし
めてたし候へし中とみ併をおさむるの
きくにくきの心ろよまみおもするきは此つゝち
字筆をそ待る人申さぬすくしくもにおくま
なくりうしきをおろくへうとぬらつきをう
まて家れしところの様当ハ待る人し画書の洞
梧思猫のしとんおもしろうねらんいうところ
しろ人さこそされ候をとりくして洞をお
とりまてりところそ七文字も中待りし候て
家と従牛ならんとみて心うつしところハ申之
紋とぬ書ハ御おり候へ綾羅綿練おり候に

織手のこゝろ深く所々まことの深さを
なる人申そくおろくしきいうとの一筆しるま
まうりなるんハ綾羅をりいくしても花の色
う待る人こそ文精撰の思くなりとももりてのお
しきハいうくなく家をなまんハしところの見ぐ
手要ならへしくまくく是をおりてく画餅
切経歴似の余意之
お月なの宅もとろよ賜る待をうとろよくおろうん
左の家まそしところの申とゝ深きとの本とけ
なまうる様は待待へし
なくなのや参る何くろふ御見に害なたり家のちらみこそ

此三句あまみえたる物かたくしてなをは
ふかそへるかしきたりて伝へはまうしふ
おもそれは可在之分別すへし人に其緑ふ
あひまうしる稲の字しきにあり此三句ことを
よりたらはいりてよりたちぬへし何よりたと
てかけん仏もあるへし句らの心をかたくかり
ある根のことゆかれは何もそ伝わたり水よう
文とけなくりとつくをそれあるときは仏
なり深吟すへし

廿五　三盗三易之事

三盗といふは句をぬすむ心をぬすむ所の詞をぬすむ
すへてをぬすむ三所なり又三易といふは深隠
條曰文章當從三易々見事一也易識事二也易
讀誦三也云々王肩よ是をみてこゝろへたよいふく
まむとれやまとうたにうつするにするかくとして
くらよさりぬるにあらん

廿六　畳句之事

畳句かしらをね句の上にをくなりす
是は月の山の山をのかしものゝちやさする物さかふ
山家のうしろねともそのよ此すゝとるれと
ましふりすかれしもりさうる絵たる問
定たりしをとすれはありその人のふかし

人よいひそらあはしきたまり京梅宮村よ無白
室白のとそへてさつきさしむもあつさくせをと
まそへわれらの世やとえよおもうへ　細り
おくゑの京へまさしと以八ひまろしゆまされ
ハ今もよも出へきたりとゆりこまつきて
万治年
廿七　京の西ゟの業
それとまりよ三河と焼へ京れ中の外たるた
外見たまり
忠三代よ於帰山の石屋水あつさうとをけられ
うしまるをてよ用のうるや文河らとあふ寄よ　細打

にこ思丸む山ゟの石ゟうあのたすかくし目もあるね
此あまて勘知へし外とまりなうねともと　急行
つく京丸派揺よもたる業えてとまりよこの
やうあて一門ハ思ねよりふうちまろてろ
てとまりたまり今河ハしくの河よむおる
てとまりたまり從京よ
こらのそれまのくゟうきを見れと術ますて三西と三藤を
とふふをとゝて
よしさうハ若まてなとし桜む女の盤とおりけうして
為家　此京ハ三伸とりふあれとゝいふとなる京
のすゑと京の洞の河にあくめり文勘新の

此哥よ
岩ねよたゝる水も埋れ苔の青お涌ゆら調声して
此所ハ山城の白妙とりふ処の鷺遊ぶ田楽
また乃所縁たりられ古まにはよろのとまれ
流泉の曲とお申す引まし侍ると続向ま也
おそハさみれぬめらうかなりとたん此所も秋の
つるハしてき人ハなりしあはれなしりふむ
ことなるの故ならて寒く〳〵しとそ此時まれも
作奉りふまつりて侍れハお所也とうけ
爰まりり南経ゆ其守て又てとまぬかなくて
も此禄稽ねするおお涌しぬるつゆ

出亭と今ハてはほとうしとるまそ外まとき月光
此所ハおりひすら川とも世比てゆのハそれしと
りふむとりひのかりしゆうまなたり

金七 あさまりやおしう松ゆりし涌草さゝかのゆのするむひ人形
まつくのおうそてうとしかきん

又
洞泉わかしれね室よも病とらて涌井の雲ハちりほり
此所のもなくれたりらんの名ハの雲とあれ解き
あくらぬらてるとしたりなとりの津をたす
ひきしきれハ所のとまつしとりにまんま津たり
うしとまり幽斜よりし作ちま通れおう
ときりの所の束練の作ち南のしもそひ

おほせられしかどもなほ風體すくなしとおもひ
やう詠しをかりつくしのてるときにおほ
てなほ中にみなもほしとおもふ給ひて
つくしのてるをとよむはかくしたまふはかり
かたそりてもうち付ぬゆかれしそへての家のうちに袖かり
涼しき秋をおもひおなじ事なりと　後撰十二にありそとをそれ
けふ山ひろのこゝろをよまれぬ哉なりにたり
思ふものゝしうらみて
此哥は月やせ上の蜀魂の名をも海山をけるものは勝
負あることのつくしけるは詠手なりける
餘情ありとまへしとすと
らんとまり
名所ものとけきに幾月まで月にもありく世のいひあへ

此哥は家隆卿は風のうちの字数すこしなきなれ
かくれてよまれてらんとおもひとにさき
うの字おほしく古今の哥なれども画部
此作百人一首のおほはなれどそこいふ字を
とつくりゐへさてもとありて此詠格なくして
うつりけりにらんとて作る作例おほし色
又る家隆秋可録也
此ひとけりまもやうそ秋の夜月とわれとおもひ初ぐん
此哥久かたの月をさはまおる　右　生のうちの月のうちの
さとけりそうむもの月のゆくてふぬ里にて
なきまかむのこと世のかれもとよりもむつかし
学ぐらんなけんにみな
例の陽句なり
六八　ちかよ遠て方よ詠君卿詞之筆

一當流よのきんてしむるにあらす出家は法のうち
にてあらそひしたるに絹或衣にあゆくものゝら
かくの如く年寄被詠之輩は法道にかなひて年老
但又同くまてらむとおほしきんのみ姓ん白
あらしは制のほかたる悪僧都の大八ゟ十楽
かくの如くなる之よき作代々の撰集の中にも出家の
よみたる法のほかのよみたる哥にも入られ
千載　僧正快修
うれしくそおもひとくる法の道に君をも身をもひ
新古　慈円
ねかはくはしはしやみちにやすらひてかゝけやせまし法の灯
右の哥はさかふ哥の先はおほよそゆつかしく內こ
よてかとおもひぬるにかれは各別のこし
おかしき流
大九　古流に臨文の人に而て可用捨
長明無名抄云流布の沙汰にて沙合に
やれの間の内の世とあるへき物なるを以ての
山家とよみてみて出家とよみて出家とし
うたの職流にてある故流布のけれ
しくに新宅よその会に先々のかたくい
しんうのまん万葉によりて出家とし文に
専ミに哥職ある人は会式のまつりつ

の年又ハ其老人の家ニてかしらとな
るへき年迄ハ年ニ付万ニ用捨
千秋あり孫子大概ニも時宜ニ京都のうち
ニ時宜をわきまへ于時時宜ニ引年かされ
さしむくしよからぬ事有しのようひと
わりして孫子のまもれとも時の法門ニせ
ニおゐて猶されハ治りしおもへるゝ
ともまてこれ会ふより剃髪大年の祝ひ
なるへく可悟い字年号

後撰 白雲のおりゐる山とみえつるは高根に花やちりまかふらん
太三妙 おもひ禁中の御むかへの事をこそ思ひしれ
あまり御須
らむまし

三十 卑下之詞之事

卑下の事ハまゆるへてかくりて慇懃尾籠
ニおゐておりしれ給ふとやかし文字ならし
ニいふ事にもおかしき年ハおかしき何人前道
執心のけれ名と拝見致し付るゝれありの無沙汰
なとんてるうきて給ひて名ハ下手なる人さし被
仰しとおり不断無調法の様ニ有しおりとも
これ不調法ニすなるもの身なしいふ洞人ハまゆ此
く御承知とうかゝひふうへまりの年なり恭
敬禮法遠慮やと仰らしくへとうやまひこしも
やうまり時宜まし事にへきたまりうく候

つまづく
鉄炮の道ハ秘伝の事やいさゝかもおろそかにせす
まず此沖の流合のよりいで長ミのゝしらんことを
はし抜群の人たしていはれぬ事也名称
あらされて先緒おほゆへしてかくへし
しるへし

三十一　芸を可詠の抄

他家の芸をしりそめてより人ことに十分ならす
一門のたしなミまて秘法に自然おのつから
そのかわりもちいても芸はあまりとゝかぬ
ものなるへしみなの加の得こそあれ

むかしより業をすくれて芸の名を業とすへき
ことなりしかして君部たく業し給へれハ性も
将軍として退屈の出来候ハよハかれぬ
よりすくなからみなはなれ給へしまて文字
くしめからあんしてまなふ文字もいさ
給ひしと文字代風雅芸としにまさ
のこさて一ふらをとめし給ふ人
三昧に入るこし芸して当世の境に入て
あらさるところを業として一所に部をもて
筆をねはまさへみならしおほやけに
されまてはなへりすさ　芸を業とする的

やうく上句と下句とおもひて下句と上句にまはして
手をとゞめしむしくしき詞一字二字をも
しるしても一首とさんさくするなり文字ことを詠じ
かくてこしらとさんさくして古き事を詠して
つくるへしいふもこゝろをあらそふ
らうにきこゆるなれなり文字ことももちゐる
やさしきんとてそのよみかたくしてそ
まうしたくさなんとてわきまへるにも
ものなり文字事ことせをもなれなり或は
うたなどは添書して揺るゝやうになる
ゑいのものことさなりなくなる例しも

くれはつゆもからねどもこゝろえしにかなへり萬葉
庭訓抄にあるらうまあらとのれしとてみち
まうせる入侍るのゆへなりとて豊国なりね
すこの伝とられぬ文のおもむきうる事
ことしき年まこそ侍るゆへしきこと六年とて
文字急用も萬庭も詠はよくしく詠吟しうる
つくしおもてなりそうのをかはらさる
誹諧へし文八字を俳諧に牡丹ぼうたん蘭らに
花おはなのこと名所の月のよみ物は其名あらて
すかれへきてすものも名とをましくこと
天数のうちてこといろはの其文とかゆるても

かゝるの哥ハ一首みなおりなへうしく又定家
おなしことうたよみてもかへしやの哥よ
哥をとなしくとりなしてよむへし但それ
こともうたよみへし遍昭の哥かにもたけ
春の柳かおしとよまれぬは始ておりの月
ところまてはうしのさくよみかの雪起さ
雪よ例りともとりおなす年なるハ川
かりおもしろくほさおほゆる年おれい
みなしきすさしてハたかれすとしもへうす
おもしろきかと業平の初秋よ菊の時よむを
りとし我人の中よ出とさみへしと文給はせよ

今とりしかるへし八雲風情のめてたき
うたをしとゝ詩歌とりて能そ業平ハ下
しそて定家つよ俊成にハみまれけるふかし
とかやと武人のねがひれハ身をの詞よ
ゆくと終らてやおもしろくそれ絶ると
名所の歌をとりあはせてよろし御吟まへ
ま年して文為殊のうたあはせりあんまへ
うたまゐかくまろくさもよみを以て
うさはてもろくもなひすつきおかり恵良
書わさしつゝよはれまみ和泉式部は
あるひれてけすれとひるみかハのとおもえそ

して秀逸とはゆるされけるのゆゑにこそ
秀逸をはなるゝをよしとすなはちこれなり
あり秀逸のそらんして業平家よりうたふ
まことこのおもしろさも略定すへしおかへき
事なり

志賀之法師ニ以花厳経の二字の秘密を唐
すこれに色身と注すれは虚空なる色身を
注すれは恭子のかれに入と世のつねの事
なるを綾忠卿の注法に色身と注すれは
虚空にてそうなり心身を注すれは恭子の
おもにはおりと世のけるゝ事しき和哥の

風情までも病なり哥は心を以て本
とし詞を以て用とすへしと云り
おもふへきなりと云々

二條中納言雅経注云哥よみは此文字おほくかれとおほゆる時の
ことわり思覚してふのみく哥よ月の志をもてうき世の中のうれ
さはなかてもえいつかかりしくくよめるとそ
てよの中のゆしろふ字つましくまくうさなり
あれはのひさるまこのひとりのひとりよりもふきもれてもうちあさ
まのとしのさらむきさ　これもしかりとかる字のゆうさとあり
月かきあたらしくときうへ哥ありはしよ句余ののさきとう
アしんおうしくありけ入さうん人のるを事かそう

第二　哥を読様之事

哥とよむより遠山千鳥なり萬葉新撰
嫌ひ随ひてよしく力てよみならへし
意ある事葉しらす何かして文をよみなして身を

自由にしてよみつけられぬ時のことは後成た
ゆゑよるとよ非道てすくよ御まゐらし
ませそはかれしも色々よわりての論れさ半
以て侍へし一方のまさらぬしさる後のこと
くしさを以てうしろの半まてはかへし候
てもなくしてよすてもしへうすまし云
貴人はしおもん様まてさる吟おはへしきと
おふさ様たなまへうしとさいくゑらぬ
すへきすほしけのさらかも優時の歌の威儀
とて侍らしうや文明は洞院今出川て云乃
さら陵夷せすをよみたる候せすはしの兆也

なれはもすまうし様さうしこそ一門のちんと
せり此衆ととりく勤来して手もおほむ
つきしうそ守らぬ

永正　社壇よて披講之時半
右社の披講のうたは他社と詠半おうまし
きとや左府の善忘それ法楽よ他社を詠し
たるを判者とをしゆんたる半也及むらしは
みそひと雖おりとも不可庶幾半也

廣田社の歌合よ
時よぬつしれんや金山扉の所おもよ月ましふさ只
なれるもき基俊判云小倉山南社の事なる

もしこれらのものの説にもさりけり乃方舎
有捨ありとみえしかりけれんや紀社を係
しかるのうたよりしさるなしとて
すへてを弁その注解ある紀社紀の名説
詠及判たり
秋哥 百首 秋の百首 たへしはなりぬる秀
のまとしりける
又同 賀注月の百首ことに書とて万葉紀李の
霧雪
秋の雨の夜のくさりの紅葉とてはかなきにはなれにしが遠
又万葉第十秋部

紅葉もひときはに鳴蝉をきゝてあきもれしひとを
同第十六秋
朝霧もひとときに鳴蝉をきゝつわりとつきんこうまも
ほの百首のまことも秋之又万葉に
かのはまゆりをくきく六月の夜の日深てきの秋新
これられ月まできよみゆるかたりのうら乃
語らすて秋も深き雪をも夜すへき世
いふられたりしもぬてさそりこえし
これん様のう
秋の 後ゝ集深見之紀秋ゝ半
東大遊訓云万葉集にて世もあり

されどもまして此世になりたまふとも、とよふ
くしすこしに初心のうたとのうたも古体と
これ也しるべしとす。但艶（えん）なとしうとくたり
風躰（ふうてい）よみさくまりてのしかは又万葉の姿さま
存せさるん好むは世下のしましそおほし修め
といふれどれしじましきこすとく詞つかひなり
後まじきいふしと察しよわおまりに稽古
くく文知りそろしけれる畜はさかんし〱ことに
つねよ見んとすべきされは古今後撰拾遺家
家三代集なりと代風体云新古今は初心の
人は見んてよろしからざるしかは然んへからしもか

ましきしたり定家卿の前の集まて入るかと
知るべし拾遺愚草よりしてはさらに此くらさ
ところありて初学しひわうたより家隆の哥
をもよくよく見へし下句よくて前的ましへ
きれ風なりけれ後鳥羽院の哥は後拾遺遠遠
なたしの前をよくく上古中古当世の風さとく
くさとりなへさうしたり古今は也実和謌
乃集なりは後撰は実多きかすくや拾遺は也実
和ねもり見まては前の餘風ありといへとも
後拾遺よ後葉するなり後拾遺は八雲にの御抄に
公任卿乃うらと入まてし半のしろさもれ

よしあし作りさだまりしよりこのかたおほく
世にいて金葉詞花まで それぞれ風をなし
けるを西行のみひとりいでゝ世に称せらる
まで後の続千載集を撰しぬれはしかり
金葉詞花の風とすそして此道中興せり新
古今はまさしく定家の撰むの人にあらさるに
ともみな人の撰にあらはしくすて定家の本意
わかれさるもの新勅とうけて新勅撰を云
らまた新古今はむかしのいにしへそて新勅撰より
実をとりて根本としてそれより為家の文続後撰
とえらひなくして此集正風体実に忘れ初む

乃学者肝要(かんよう)なり 先達称之此後又言の
のこる続後撰の後後撰者定家孫為家撰とも
さしとかかりくて風体を論しかるへし
又後にも猶ていにしへ和歌の風あらためらんと
その党好むからしもたかうよく一集々の建立を
知らりしらで見たるらし 撰集のために詞
言よらそのまてまいりまてこれは左右をよろしめ
也でもあてまつりけるに有る文のなかしいふにも
百首も十首も千首の中よりしわかれあそ又何の
言の合乃たよりにてもこのたりしにもとかくへし
先精て撰乃後なり肯綮は理の中にすくるなる

哥とハかく作るとありしかりといハれてたんへしと
師説よりされしとさと順徳院(じゅんとくゐん)よりよみへ
され詠哥乃大概百人一首なとの是非哥の中なとを
じちに吟しらへて哥わしくとさんして
わかり八口よも哥をも御いひてしてかりをもとえん
とわりて古哥よ吟しらへてまるへしとより
又翁の集よもそれの作者くわりて
哥ハ三首十首も作者たりしの哥これあり
ありといふの作者よ准すへし其の哥もよい
ならむともらくのしくかくのかうり作者これ
有へしよりく分別してまるへしとそ幽斎

まうされ侍りぬと

可六 俳人哥とさせ合せん時能く沈吟して
可分是非耳

一 俳人の哥とさてハいかにも作ゆる是を流行とミ
し一切色も初心もうくとなしまれ心をミるう
ゆへし性を草木禽獣(きんじう)よおよすへからぬ
ところとめしゆへよしのれなりうての作請
にも皮日休(ひじつきう)ハ百煉(れん)して字をもとめ千煉して
句をなしたまひし玉屑(ぎよくせつ)よありしや又山谷もまた李
賀月鍛とてそしくよれり用しまことにふさるる
とかん弟子をむにて知ぬ初心の学者ハいくたんや

うくれしき氣の句とゝろにまう事ハ不
勘の事なり又さるまふまも人の句と號
吹してわつねむと付かれハ失備わる事なり
云名わよそ例わりくらかしやの句と基像
たんせう能し事なりすへておりんくり定
人のしう後わたんするうせあれハ事よかれく
気あ作く作りとこと又円わよ琳質ゟ事あり
は道と挑するあれハ没後まてもおりふ事なる
よ人の句とたうくみてハ曲たうくし又井
輕わよ忌氏のとハみての句も作りこちと挑す
こもしう句とてて和書にもとろそうたるにも

不可存有他之差別矣　其門趣訓句とうして家
て吉趣をさとしる事ゟもましにた向のこと
にてはみな人にしたすいつもこゝろえらるまてハ
作りし也さはこをゆへ下は上手も学ハいふ人
のこゝろさハいふもしもおかされとも作したいふ
く用られぬ數の添地とハ播辭の句わたれ
結句雖ときくへきつけてそうつゝ待ちるを
主よりて句れ吉想とも引人のこは終る
くもれるしよりもやせこそも其花も引つく
まれまへ収めるは作りすこそきさりなく
さして平下十ふへしてる事とて打作り作り

さらはすこうし斎藤のこれ法月的おもりや
黒崇三ケ年てうんしやりしよくりて家風
よそおへじめ心よ明月紀と案しとれて
仰らしくも身をおるこれのまさしくそおりひきす
るこのそくろ年こへ中仰ら年いくくらうい
めしそお用し仰らしきく是と以ておりふま百
人一首撰せらましよ捷辞とおりへ家悠翁
もすれねいうく用られね人の歌も入まうり
ゐとの年よ中しおりひ給へ家代々系と引合て
勘弁すへしと御説

亦七　短歌之事

家蔵より東御列へるとねしてるの条ゝの色え
の事よ出るはさみくこまくらし繁の名何に仏
にすくなく文絶つくしく所なすら事なるは
理のさりまりはてかひのへくらくはとろし
めてまふくこしと筆まてはりねとも詞をおとは
つらなる文句文のこしくしくしつねまぬら詞
なしく代以ていかひのへていふにも出よえん事
つらよ仰へしくる条の統も此からすてはる条
にいる母は歯云よは以てくと申されはひし解悟
修撰なり出まうとすね無之由二首とらして申され
はひし　次短歌之部号よ字事我無には義

なかうたとある趣は短歌の事千載集の
ゆかれとやされはこしらへ侍るにもそれは古今集より
こそ短歌とうたはれ観撰にてはへりけれそ
は短歌のこゝろ半もいはれたり万葉集の頃
よみてしは或一字のうへことにしてはへれ
こそよの集の短歌のうたとおりしるくはへるを
よりのちの集の短歌ひとつへよせ長歌と短歌と
いふゆゑよわかりはそれしるところしすやところ
かくし初めし終またはまた一乃古筆すでに
此流にうつくのすみかれしてはためかしある
ましらはうるを付侍しはへる家門ありは常

縁一人のと旅は句ごとの心持かへ候ものは殊
なるましく候は風雅も第一縁をつけて何方
使されてはひけるものは是をぬかる
なりてはひけるお俳句をもにやされはし
しるとも此それと連歌は新約なりしとかは
之句し申おもほ又長歌はなく長うしても長歌
をつくりてうたりす縁之上の筆万葉集第一
證拠なるへし仍而よみし諸定わゆへしと申事
なり
・旋頭歌の筆（?）従鈴（?）或云旋頭は一しらずとうへ
もしかみは一家西訓おかりあれは上下乃

句文字のこすおかしきなくしてたゝちにあをさえ
七はたゝう他ししらたいは上下二句によしありて
詞林採葉抄には古今には積らのをとりわけて其おを
のすゐことく楊略互別の心あるをわかりよく
おしへひとつへき事にかゝりはしめ侍るにも心得
きゝわりとりわけて正義といひ略して奥かある
きこえはまいりても奥の正義をさわりはまち
おほきかたはにみえしけるの句ことよりの句こ
をとりわけそて成一字にかゝるゝは詠し
ゑかるとてむと一首のうへのよそよしむはおる
まとめ文字まてかくりきかのとてあまりかゝ

くしきよしへしきくにたるぐ
こゝそ文夜あるは漢しむかうたかう字の夜つける
切とも夜とも以へかいは二字一字ましてしかる義人
成八　意之有可強押し半
八雲御抄にはひのきてまさりてはそこそ其おは
それとまことにもゝすすて様の下海にあはれを
もはなは富士袖はまるにみちせくれなれともおもしゆる
ひかりあかの風情とまることくまにうけともまへん
いるん半四季のうくはにしておもふへし四季の
ゆくはいそくしらしりまうしと作り逆訓
ここもいのくこの部を立てた中さへかゝりて玄和歌

とのよしへしとおほしけるそのゝちおほしてあらは
りしうたしまてはしらく又おほかりしく定家
のこひのうたよまんと紀貫之とられとてお
ミてせさすねもそのうたはをとめりて仰
ほしへられしこゝに定家卿よ誹諧の事いつれも
ところとゆへく俊成にやさしうよむへき
を家誹諧のうたのすゑ其是は堀河院
の比より此の誹諧歌はやうやくあつねのうたの
うたにかはりてかんてはしとてよきもゆく
こまかにやさしきうたのかきてやんへきよしよ
代々の集にうたのあはれおほく入集せる人の

事どもとおもひすつれたかれはめでたきかたかん
是風とゝまりしも侍りへしとも其の事
古今　誹諧之事
八雲御抄に誹諧といふはわらひことをいふにはりらん
まさしき事をたはしくひつかしとも不通
俳をかきたりとおほえんありとも後拾
遺より入り後拾遺誹諧のうたをへすてゝしかの
よろしきも後撰拾遺にまれにいへり續後撰にはいれ
不知けしの事なれは末代の人にも可定之也千
載集にもあり御抄によき事なれは入難せ
新古今集にはなき事也後拾遺千

載集にも入ぬかたなれハかうひの歌なれとも
そのこゝろとりふりやわらん但たり侍るよき
歌なれハすなはち古今とうたへしと侍り
此のらいしき集のうたとことふ歌侍らかん
遊於おほせられし古今の歌なれハ
おくとハいふすまてはみれつけのといひくにも
詳なるかなしくはりものはいかる
羇旅　述懐傷之心ノ歌
述懐ハおのれひとのふかくいふ歌なれハ依道よ
つくられたりけるなし述懐なりとておほやう
うしはきはあくまかなしくおもへうるすまへる

とられわうひハ身をうらみひかなしひの
述懐なりとく名引の歌までいそれさへわすれ
かくなるまゝし侍感きて述懐の両首ありさ
こゝちも侍るすいかにいはんや身にまかりて哀
なるよ此所そのとくすはかなしくさすまさ
わかなかハ哀なるさる歌なり述懐よとりて
十体のうちといふくいふに此体にて侍へきなし
あつらみ述類よ見んしなかり又哀傷のことくの歌　離
哀傷哀とりふ歌ありさかりし撰者の歌や
離别とりふ哀も人の死去のうれしさつよう
あはれなり哀とりふ古本の妙をとらるよ

うらみ哥なり撰者は方案ありけるにもあれわり
悼のうら乃半なり南隣のいつみの哥なく
いとたよのそみてともうくもあるへしそれも
おもひよせられけしくもくりそていふすとも
まなの心さらそいはんするゆへにおほしよせ
ぬのうけりのみにかとしはてしてさらに追加なしくの
哥錦を殺する似も御うへし又代々集に長
集の部と猶よ而かねもみえ又撰者の意業
まりそ中央よゆらぬるも御かなり子細に
へこ半なり長據の部立なしそれいつくと
あれは拾ひ心ここ書様のへ出てなかれたるなり

述懐の哥の中に　　俊成
いかにせん御垣守のみちとせもさらに年たけぬる
大方の秋の寝覚のなかき夜も君をそいのる身をおもふとて　　家隆
和歌の浦や沖つ塩合にうかひ出るあはれ我身のよるへしらせよ　　同
藻塩草かくともつきし君か代の数によみおく和歌の浦風　　為家
昔の下よ埋れ名を立残すらんれのこしてや和歌の浦の哥　　定家
とし此の二首いすのつねの述懐の哥ならす日

うらみまつり侍し家にもおかす侍の三首を
前道述懐とかんかへたり又　後正道照
ころさらにまゐりてその時申ますに嵐にたへ侍し道にも絶也
右佛法修行の筆とありて神代初也の字あるは
奥のうちにつたへられとりかの筆とものこ述懐といふ
つかはれ乃前とおもひて能定よりあまりにも勅弁
ありさまし又懐旧ことにおなし法華とものふたつ
貝ふ筆あり
むかしの昔をおもひしとはらかのたちまちにひしとおもひまれるは　後成
薫邸　前一首落ちて本のまゝ

拾遺愚草下部　行路柳　みちのへのあかりれ柳のえたにむすひて初勅
あはれあはれひのなかりしかな　此前石はなかりけるにとて
ありしころありし此筆とりしとも
このみちの奥わたしの僧のかたりしにおもひてとらこえ
めしかねしにもあまりにもかりそめの
しらさ　此筆　御作まことすらのこの筆のとれ
まさにありしことかたりしおもむきにおそかり
ゆへそこのあまりにも法そひらりけき
むかしは採菓汲水の如くおもひしくゆかしくて
まてかしかしくまおりしく海士ましし　薪　宜しきのみ如薪尽火滅
めしは筆無ふ友潤之まれかしその初也の人
かくのうの筆とさんまれまくらくされは幽棲
あるおもよりかねてしれいもう筆
よ家のたかひらうよの法華ま木葉白ある雲
のかそくされあるいむしま赤白黄道遠流
かえらくのしらくたこうてうまことに奈落あって

かうしみえねとされしは入道前乃説に
物しりふかれは弟子の古白文ま末白末ま
うくとあり此おしかうのうしぬくに来
いまをみん合てうくわゆり西行法師のうち
より写し
のまりの方に有
古今六　　宮内秋風みえ
候まつふ時風とふきに秋萩のうへりもゆかん人のうろ乃
指南上総の介　　定家
やまおろしふねをえのそよすきこんすみもえしるはのをめ
源兼昌の歌

あられて空にもみしあをかまえたゆすかるれはね
おしの河よまうりてとゝくよりゑれを
此うらけり人のひとす此人の花何かあかり
清撰
沖白月もれ申らにはき寄る日をさ出待月にあかりしに出て
太清撰の中にみねえて月とも寄稿にあそひけりこれ
まみねつてゆきうをとひすとしてし清撰の至るあるみ
あり
旅に文あるなる旅なり国ともおほしくてなきち
てうよもさへし旅の字とろりのこえいをきを
よりさうす東此別の指体にあこ之

後撰

くやしくぞ後にあはむと契りけるけふをかぎりといはましものを [illegible]

新古

われならぬ人のさくひまで[illegible]月とも[illegible]しるものを

太政大臣のうしの文字[illegible]てもかの[illegible]

かれしうらく[illegible]すへき[illegible]そ[illegible]してね乃

かりつつをとしいふむかし後勘し

新古

まつこと[illegible]つる月も文字[illegible]し山の[illegible]月

けまちて[illegible]しいふ[illegible]かりまち[illegible]

こふ人の[illegible]邂逅[illegible]てまれなりし

いふし[illegible]かりてすこしかりあり

ありと常縁のあるよみ之

新古

思ひわびねしかしきのかなまで[illegible]秋風そめく

山寺過不逢山[illegible]かり山[illegible]しし日

古今よりも[illegible]

新古

いかにてもわすれて[illegible]し山の[illegible]とりとへし

[illegible]とりてのかへ[illegible]

古今青の人よりせとよつり西出陽関無故人

けふ[illegible]けれ[illegible]

かはしと喜縁なまあり

新古

わすらふや袖よりは枝の花きえれぬ音成中に流れ
為家卿お懐旧といふ題おわかりし山方拾見福し
もゝとせし卿といふ題にわかしとし山浪かゞ
いふ題卿ち浪とし袖さるを

新古

夕顔の露のひのくれ霧の上まなふらてる月のかけのまや
太液芙蓉のうこたり山方水晶と翁りのつかの
ゆまゝるやうりにとけるうれ福くと拾
義せしか音縁の山よ

山にて拾え似浪柳
喜家のおあり

源氏若菜下

うきかたりかゝのうこれたいの上まゆきゝ飛
なくこゝぬらもおかしくそてうし袖て枝のよ
とせうりられれ来てはまゆかしき五年なれ
そうあさうてたいんとあり鬼角殺きのそ紀
うきか鄭とえてしむをわつひゆへしと旅
浣泼衣おは生落の句といふ年ありぬとへいさら
つ月のゆきよつきせもとたうくよひくわけ
ゆまきい山しゆきといつておと楽すうしといつき
せすたりしといふたかり生落しい上のたうくと

まつきてたらく松にてうかけりけれはくし
以ふかゝり古れし紫つきにかけの筆に鳥
ありほり入棲より揺古之
まつて古乃しきの月餅も紫もありくろ
つきうり以て仰く一帝範云如巧匠之制八
木直者以為轅曲者以為輪古めし紫赤めけ
明月記及古筆家定家卿筆
世紀のうへ乃うれ　かりゆのえつふかり
ことにほしうらす　まかかい納涼
うしのへん蕭日　冬日の雪
うしのられせのゆふ　ゆきそのしれんひ

添撰

これをうれしきへ弟子にれ松ほよおとせとねて咲の花
たのおうねてを添ようけてたりとおのえうけ
てのうしよりねてよい以ふ紅もありうちの筆に
ゆくうけてとそりの川よみゆりんに遠す
つしよりく吟味すへし
まうつねむさうしれは附ゆ子与をとちうせうらぶやよゆん
たてせうひうしうん　しゝと弟子てたらすん
すけのふうたく男よりて　添よ此のまう
まの部たしに入へきしくられあらすれうて
万ありのゆうたうられ世のかれ此の筆とんめ

すへし

庭訓抄　衣笠内府被送進一冊也

八雲口傳　号詠歌一体為家作也

四條局口傳　号阿佛

千代鳳綾抄　二條攝政良基

寛文五年乙巳正月吉日

中野市右衛門梓行